

「かけがえのない命、そして私の退職」

「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」。そんな気持ちで迎えた教員生活最後の年、退職に際して思いがありました。満腔（まんこう）の謝意を抱いて、潔く職を辞し、退職を次に向かうステップにすることです。事実、一区切りつけて人生の第2ステージに向かう高揚感があり、母校での勤務は喜びと充実感に溢れていました。

そんな中で突然、卒業式を半月後に控えて、生徒の悲報が飛び込んできました。思いもよらない出来事です。半ば茫然自失で生徒のもとに駆けつけました。周りのざわめきをよそに、静かに目を閉じる彼は、凜として厳（おごそ）かです。痛哭（つうこく）の情にさいなまれ、頭を上げられないまま、「どうして、なぜ？」と自問を繰り返し、一方で学校責任者として、ご家族にどう対応するか腐心していました。彼のことを心から悼みながら、しかし胸中は複雑に揺れ動きました。

大きな悲しみから半年が経ちます。時が経つほどに、クラス担任の号泣が耳の底で大きくなっています。立場で考えていたことや保身の鎧が少しずつ剥がされ、若くして逝った「かけがえのない命」への真（まこと）の追想が、少しずつ出てきました。

誠実でごまかしのない彼の生きざまが、本当に愛おしく悔しい。彼を想う時、必然に私を考えます。これまでの実践が、人として、真（しん）に人を育てる教育であったのか、確信することはできません。自分本位に知識を振りかざし、虚栄（きょえい）で身を包み、慢心した36年間でなかったのかと、私の教員人生が根本から問われます。